
受け継がれる運命

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受け継がれる運命

【Zコード】

Z3698D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

アルテミスが姉とも慕うもう一人の月の女神セレネ。彼女は美貌の若者エンディミオンを愛するのだが。ギリシア神話において月の女神の恋は報われないのでしょうか。

受け継がれる運命

月の女神は一人いた。よく知られているのはアルテミスだが彼女とは別にもう一人女神がいた。

その女神の名をセレネーといつ。アルテミスが金髪に緑の目の少女性的な美しさの持ち主であるのに対して彼女は同じ金色の髪と緑の目を持ちながらも大人の女性の姿をしていて穏やかな顔の女性であった。身体もまた女性的でありその心はさらに優しい女のものであった。そうした女神であった。

彼女は言うならばアルテミスの姉であった。血はつながつていなが二人の仲は姉妹そのものであった。いつも二人で夜の空を駆り月を導いていた。

「ねえアルテミス」

ある夜のことだった。セレネーはアルテミスに顔を向けて声をかけてきた。

「貴女は結婚はしないのかしら」

「結婚ですか」

「そうよ。貴女も女性なのだし」

セレネーはその少し垂れ気味の目を彼女に向けていた。その目は二重で実に澄んでいる。やはり同じ碧でも少し釣り目で二重でもその光が強いアルテミスとは違っていた。

「何時かはきっと

「まだ。それは考えられません」

アルテミスは戸惑った顔でそうセレネーに答えるのだった。

「私は月の女神になつて間もないですし」

「まだお仕事の方が大事かしら」

「はい」

正直にセレネーに答えるのだった。

「そう考へています」

「けれど貴女のお兄さんは」

「兄は兄です」

何故かアルテミスは兄の名が出ると顔を不機嫌にさせた。彼女の双子の兄である。アポロンのことだ。

「兄のあれは悪い癖です」

「そうなの」

「そうです。私もいつも言つてゐるのですが」

アポロンは女好きでありしかも美少年も好きだった。そうした見境のないところが妹は許せなかつたのだ。それでいつも注意しているが聞かないのである。

「どうしても。なおらなくて」

「困つてゐるのね」

「そうです。どうしたものでしょうか」

「いいことね」

だがセレネーは。アルテミスのその話を聞いて穏やかな笑みを浮かべるだけであつた。

「それは」

「冗談ではありません」

だがアルテミスは生真面目な顔でこう言葉を返した。

「子供も何人もいて。本当に」

「皆そうなのよ」

セレネーは怒る彼女にまた穏やかな顔を向けて述べるのだった。

「神様も人間も」

「それが好きになれません」

アルテミスは口を尖らせていた。

「ふしだらです」

「愛を楽しむのはいいことなのよ」

セレネーはまたアルテミスに述べた。

「誰であつてもね」

「愛ですか」

「私もね。そうしたいのよ」

意外にも彼女自身はまだその経験がないようである。それが言葉にも出た。

「けれど機会がなくて」

「そうなのですか」

「ええ。それで貴女にこんなことを言つのもあれだけれど」

「いえ」

しかしアルテミスはセレネーのその言葉には素直に首を横に振つたのだった。

「それは違います。先程お姉様が仰つたではありますんが「愛を楽しむことはいいことね」

「そうです。ですから」

アルテミスはそう述べる。

「これから愛を楽しまれては如何でしょうか」

「そうね。相手がいれば」

アルテミスの言葉を受けて考える顔になつた。思案に入るその顔も実に美しい。二人が並んで座つている天空を駆ける馬車の後ろにある月の穏やかな白銀の光で照らされてそれが彼女の白い顔をさらり白く見せていた。

「いいのだけれど」

「いなのですか」

「ええ。それに」

「それに」

またセレネーに問う。

「何があるのですか」

「一度ね。ゼウス様に言われたことがあるの」

「父ですか」

「そうなの」

実はセレネーはゼウスの直接の血縁者ではない。しかしそれでも

兄であるヘリオスと共に今も神でいるのだ。それは彼等の温厚な性格故にその仕事をすることを許されていましたからである。

「私は。愛をすれば不幸になるつて」

「不幸に」

「月は。悲しみの象徴でもあるからと」

少し俯いて悩ましげな顔になつた。その顔はアルテミスから見ても心を引き込まれずにはいられないものであった。

「そう言われたわ」

「そうだったのですか」

「その不幸が何かはわからぬけれど」

「愛することができないのですか」

「その前に相手を見つけることもできなくて」

「そのことでも困り果てた顔を見せるのであつた。

「まだ。愛を知らないの、私も」

「そうですか」

「けれど。不幸を気にしていては駄目よね」
ここで顔を上げて言うセレネーであつた。

「やつぱり。私だって」

「そうです。誰でもなのでしょう?」

アルテミスは明るい声で彼女を励ました。

「それでしたら」

「そうね。私も」

「誰か見つけばいいのです」

アルテミスはわかつていなかつたがここでは姉とも慕う女神を励ます為に言つのだつた。これは彼女の精一杯の優しさであつた。

「これから」「わかつたわ。私も誰かを」「好きになります」「ええ」

二人は笑顔でそんな話をした。そして暫くして。セレネーはオリンポスの庭での神々の集まりの中で豊穣の女神であるデメテルからある話を聞くのであった。

「エリスですか」

「そうよ。エリスにね」

セレネーよりもさらに穏やかで大人の美貌を持つデメテルはにこにこと笑いながらセレネーに語るのだった。その黒い髪と目が実に美しい。

「凄い美少年がいるのよ」

「そうなのですか」

「私も一度見たけれど凄く奇麗で。彼氏にしたい位よ」「それはまた」

デメテルの冗談に思わず苦笑いを浮かべた。そしてワインを飲むがここでデメテルがまた言うのだった。

「よかつたら貴女も彼を見てきたらどうかしら」

「私もですか」

「ええ」

そのにこやかな笑みでセレネーに述べるのだった。

「それに貴女はまだ」

「はい」

デメテルが何を言いたいのかわかつていた。それは。

「一人だつたわね」

「そうです。それでは」

「何の気遣いもないわ。楽しんでもね」

「そうですか。では私も」

「私も一人だし」

デメテルはまた笑う。実は彼女は夫がないのだ。今は恋人もない。それでもゼウスや人間との間に子供が何人かい。豊穣の女神は恋も知らなくてはならないのであろうか。

「気兼ねなく楽しませてもらつたわ」

「そんなにその若者はいいのですか」

「やっぱり男は年下ね」

それはデメテルの趣味であった。

「だから貴女も」

「その若者をですか」

「ええ。私はもうどんな感じか確かめたから貴女もそうすればいいわ」

「けれどデメテル、それは」

セレネーはふとデメテルのことを思った。彼女もその若者を好きなのではないかと思ったからだ。わざわざ会いに行つて恋を楽しんだのだからこれは当然であつた。

「貴女は」

「私はいいの」

だがデメテルはその優しい笑みでセレネーに言つだけであつた。

「私はね。もう新しい恋人がいるし」

「そうなのでですか」

「貴女も。恋をするといいわ」

そう言つて彼女に譲るのであつた。

「それでいいわね」

「わかりました。それじゃあ」

彼女の言葉を受けてこくりと頷くのだった。

「行つてみます」

「エリスよ」

デメテルはまたその若者がいる場所をセレネーに教えた。

「そこで羊飼いをしているから。わかつたわね」

「羊飼いなのですね」

「ええ」

セレネーの問いにこくりと頷く。

「そうよ。それじゃあ」

「はい、これが終わつたら行つて来ます」

こうしてセレネーはその若者のところに行くことになつた。まだ昼だつたが仕事の前に急いでエリスに行つた。そうして草原に行くとそこに赤い癖のある髪に琥珀の瞳をした若者がいた。

「彼なのね」

セレネーはその若者の美しさを見てすぐにわかつた。彼こそがデメテルの言つていた若者であると。見れば顔だけでなく身体も整い肌は白くまるで月の光のようであつた。

「何て奇麗なのかしら」

セレネーはこの時空にいた。上から見下ろす彼は彼女が今まで見たどんな神や妖精、人間よりも奇麗で美しかつた。彼女は一目見ただけで彼に心を奪われたのだった。

「もつと近くで」

自然にそう思つた。それで密かに降り立ち何気なくを装つて彼の前までやつて來たのだった。

「あの」

「はい」

若者はセレネーが声をかけるとすぐに彼女に顔を向けてきた。見ればその顔は上から見るよりもずっと美しく映えるものであつた。

「貴方は。どなたですか」

「私ですか」

「はじめて御会いして失礼ですけれど」

「そう謝つてからまた言つ。」

「気になりましたので。それで」

「私の名前ですね」

「そうです」

「ぐりと頷いて彼に応える。

「何と仰るのでしょうか」

「エンティミオンですか」

彼はそう名乗った。その澄んだ高い声で。声もまた非常に美しい

若者であった。

「僕はエンティミオンといいます」

「エンティミオンですね」

「ええ」

にこりと笑つてセレネーに囁つのであった。

「それでですね」

「はい」

「今度はそのエンティミオンがセレネーに囁つた。これは順番であった。

「今度は貴女のお名前を知りたいのですが

「セレネーといこます」

彼女はそう名乗つた。

「アテネから來ました」

「アテネからですか」

「ここに。移りまして」

アテネから來たと言つたのには理由があつた。それは彼女の神殿がアテネにもあつたからである。それでこりつ彼に言つたのであつた。

「そうして貴方どこで御会いしたのです」「そうだったのですか」
「いつもここにおられるのですか?」
セレネーはそうエンディミオンに尋ねた。
「羊飼いをされて」
「ええ、大抵ここにいます」
エンディミオンは正直にそう述べた。
「そうして可愛い羊達の世話をしています」
「そうなのですか」
「はい。貴女はいつも何処におられますか?」
「今までにはどうにも居場所を見つけられませんでした」
少し暗い顔を作つて言つのだつた。そのつえでまた言ひ。
「けれどこれからは」
「これからは」
「ここにいて宜しいでしょうか」
そう彼に言うのだつた。
「貴方さえよければ。どうでしょうか」
「ええ、いいですよ」
エンディミオンはこりこりと笑つてセレネーに言ひ。彼女はそれを
聞いて顔を一気に晴れやかにさせるのだつた。
「いいのですね、それで」
「はい、貴女が何処にも居場所がないというのなら」
これはエンディミオンの優しさであった。それはセレネーにも伝
わつた。
「どうかここに」
「わかりました。それでは」
「はい」

「うして一人はそれから昼はいつも草原で一人でいるようになつた。それはセレネーにとつては至福の時間であつた。昼は彼と会い夜は月と共に彼が眠つているのを見守る。そうして楽しい日々を過ごしたのであつた。

そのことはアルテミスにもわかつた。それで朝に彼女がエリスに向かおうとする時に彼女に声をかけるのだった。

「今日も楽しそうですね」

「ええ」

セレネーは上機嫌だつた。その顔でアルテミスの問いかに答えるのだった。

「今。とても幸せよ」

「そうですか。それはいいですね」

アルテミスもそのことを素直に喜ぶのだった。

「恋というのは。いいものなのですね」

「私も。今まで知らなかつたけれど」

セレネーは一瞬だけ寂しい顔になつた。しかしそれは一瞬であつた。

「今は違うわ。毎日がとても楽しいのよ」

「恋は。それ程までに素晴らしいと」

「昼も夜も」

セレネーは言うのであつた。

「とても楽しいわ。これが恋なのね」

「恋ですか」

「この世にこんなに楽しいものがあつたなんて」

「うつとりとした声になつっていた。その声から彼女が心から楽しんでいるのがわかる。だがアルテミスはそんな彼女を見てふとあの言葉を思い出すのだった。

「けれどお姉様」

「何かしら」

「私達は月の女神ですよね」

「ええ」

セレネーはアルテミスのその言葉に何を今更といった顔を見せた。

「それがどうかしたのかしら」

「確かに私達は」

アルテミスはそのうえで言つ、

「その恋が決して実らずに。そして」

また言つ。

「悲劇に終わると。その運命だったのでは」

「若しそうだとしてもいいわ」

しかしセレネーはこう言つのだつた。そのことはもう完全に頭の中に入つていながらわかる。彼女はそれ程までに今の恋に溺れていたのだ。

「そんなことは」「宜しいのですか」「ええ、いいわ」それをアルテミスにも告げる。「だつて。今こんなに幸せだから」「今が幸せだから」「そんなことはどうでもいいの、本当に」「不幸が田に入らないまま言葉を続ける。彼女は完全に今の幸せの中にその身体を浸し恍惚としていたのだった。「この幸せはきっと永遠に続くわ」「永遠にですか」「悲劇だなんて信じられないから」そのことを実際に言葉にも出した。「このままね。ずっと彼といられるわ」「それもですけれど」アルテミスはまた気付いたのだった。「彼は人間なのですよね」「ええ」セレネーはその言葉に答える。「ただけれど。それが何か?」「人間ですか?」アルテミスはそこに不吉なものを感じていた。しかしセレネーはやはりそれにも気付いてはいない。そこが二人の大きな違いとなつていたのだった。「私達とは違います」「!/?何が言いたいのかしら」アルテミスの回りくどい調子に首を傾げて問つた。

「よくわからないのだけれど」

「私達は死にませんが彼は死にます」

アルテミスはセレネーのその言葉を受けて率直に述べた。彼女が言いたいのはそこであったのだ。

「ですからそれは永遠には」

「そうだったわね」

セレネーはそのことに気付いた。それに気付いて顔が暗くなるのを抑えられなかつた。それは急にだが全てを一変させるものであつた。

「あの人は永遠にはいられないのね」

「はい、このままでは」

アルテミスはそのことをまた告げる。

「どうされますか、このままでは」

「どうにかするわ」

セレネーはすぐに思い詰めた顔になつた。自分の気持ちを抑えられなくなつてきていてもわかつっていたがそれでもその気持ちを止められなくなつていた。

「絶対に」

「何かお考えが」

「ええ、あるわ」

その問ひにも答える。

「何があつてもね。彼を失うわけにはいかないから」

それが彼女の気持ちだつた。

「絶対に」

「永遠の命ですよね」

アルテミスは神にあり人にはないものを言つのだつた。

「必要なのは」

「ええ、それは絶対に手に入るわ」

セレネーは思い詰めた顔でアルテミスに答えた。

「だから。私は諦めないわ」

「そうなのでですか」

「永遠に彼と一緒にいたいから。だから」

「そうしてまた言つ。

「何とかするわ」

彼女には考えがあつた。そしてそれを実行に移すつもりだつた。彼女はオリンポスに帰るとすぐに行動に移つた。ゼウスのところに向かいことの次第を申し上げたのであつた。

「そうか、人の少年をか」

「はい」

セレネーはゼウスの玉座の前に跪いていた。そのうえで話をしたのである。

「何とかなりませんか」

「愛しているのだな」

ゼウスは玉座の上からセレネーに問つた。まずはそれからだつた。

「その少年を」

「その通りです」

セレネーは素直にそれを認めた。

「永遠に。一緒にいたいのですが」

「エンディミオンだつたか」

ゼウスはその少年の名を知つていた。それをセレネーにも言つた。

「確か」

「御存知でしたか」

「うむ」

セレネーに對して答える。

「噂は聞いていた。だがその少年は神の血も一滴も受けてはいない」

「それも知つています」

神の血を受け継ぐ人間は多かつた。だが彼はそうではなかつたのだ。

「容易に不死になることはできないぞ」

「それはわかつています」

セレネーとて愚かではない。そのことはわかつていた。だがそれでも、あえてここに来たのである。その理由も既にはつきりとしている。

「しかしそれでも私は」「どうしてもか」

「そうです」

必死な声でゼウスに頼み込む。顔も必死なものであった。

「何があつても。私は彼と共にいたいのです」

「永遠にか」

「はい、永遠に」

セレネーはまた言つ。他には何もいらないとさえ思つていた。

「彼と。なりませんか」

「結論から言つ」

ゼウスはセレネーの心を受けた。彼は気紛れであり好色であつたが決して邪悪な神ではない。だからこそ彼女のその真摯な気持ちを無碍にはできなかつた。だからこそいつ言つたのである。

「それはできる」

「まことですか？」

その言葉を聞いたセレネーの顔が急に晴れやかになる。救われた、心からそう思つた。

「それは」「嘘は言わぬ」

ゼウスもまた正直にそう述べたのだった。

「あの少年を決して死なないようになることはできる。そして」「そして？」

「老いないようになることもな」

「できるのですね」

「しかしだ」

ゼウスはここで顔を急に曇らせた。そのままでもセレネーに言うのだった。

「よいのか？」「！」

セレネーはゼウスが急にその顔でこう言い出したので不思議に思つた。そして怪訝に思つた彼に尋ねたのであつた。尋ねずにはいられなかつた。

「何がでしょうか」

「確かに永遠に老いず、死なずに済む」とはでかい「」

彼はそれは保障した。

「しかし」「しかし？」

「それだけではないのだ」

彼は顔を曇らせたまままたセレネーに告げた。

「彼は人間だ。我々とは違う」

「それはわかつていますが

「いや、わかつてはいない」

ゼウスは少し悲しげな顔になつた。それには理由があつた。

「このまま不老不死になればしないということだ」

「こままでは」

やはりセレネーにはこの言葉の意味がわからない。どうしてもわからないので首を傾げるしかなかつた。だがそれでもわからないのであつた。

「どういふことなのか。申し訳ないですが」

「簡単に言えば目覚めることがなくなるのだ」

ゼウスはそう彼女に述べるのだった。

「目覚めることがない」

「そうでなければ。死を逃れることができないのだ」

「何故ですか?」

セレネーにはその理由がわからない。やはり彼女はわかっていないかつたのだった。

「どうしてそのような」

「人だからだ。人は老いて死ぬのが運命」

ゼウスは告げる。それはあまりにも残酷で変えられはしない、そうしたものであつたのだ。

「それを変えるのは。私にもできはしない」

「ゼウス様です」

「誰にもできないのだ」

ゼウスはこうも彼女に告げた。

「どうしてもな」

「しかしそれでも」

セレネーは必死にすがる。すがらずにはいられなかつた。彼女はどうしてもエンディミオンと共にいたかつたのだ。それも永遠に。その気持ちは変わらなかつた。

「私は。彼と」

「わかつてある」

ゼウスもそれはわかつてゐる。だからこゝそその返事も沈痛なものであつた。

「わかつてあるが。それでも」

「そしてそれを保つには眠つていなくてはならないのですか」「永遠にだ。他にはない」

ゼウスはまたセレネーに告げた。

「私には。それ以外はできないのだ」

「他の神にもですか」

「その通りだ」

ゼウスはさらに答える。しかしこの答えもまたセレネーにとつてはあまりにも残酷なものであった。彼女にとつては受け入れられないものであった。

「わかったな」

「では彼と共にいるには」

セレネーは震える声でゼウスに問う。それでも彼女は問わずにはいられなかつたのだ。

「それしかありませんか」「残念だがそれしかない」

彼はまたしても告げた。

「それしかな。それでよければ」「そうですか」

「私には勧められない」

ゼウスは言う。

「起きぬ者と永遠に側にいても。悲しいだけだ」「はい」

セレネーは今にも泣きそうな顔で応えた。その通りだつた。自分が起きていてそこにいても相手は目覚めはしない。それでは愛がないのも同じだからだ。

「それこそ。自分も眠らなくてはな」「自分も」

今のゼウスの言葉にはつとした。今のその言葉が。彼女の心を捉えるのだった。

「自分もですね」

「そうだが」

ゼウスはセレネーの今の言葉に答えた。

「まさかそなた」

「はい」

セレネーは静かにゼウスの問いに頷いた。

「そのつもりです。私は」

「だがそれは」

ゼウスはセレネーを止めようとする。止めずにはいられなかつた。

「そなたにとつても」

「ですが。それで永遠に彼と共にいられるのですよね」

セレネーはそのことに希望を見ていた。それで彼と共にいられる
というのならそれでいい、心からそう考へるよつになつてきていた
のだ。

「それでしたら」

「よいのか?」

ゼウスはまた問うた。彼女を気遣つて。

「それで」

「夢の中で彼と共にいられるのですよね」

「ヒュプノスがそうしてくれる」

眠りの神である。冥界においてハーデスの側に仕える神の一人だ。
彼は人々に眠りを「えそれと共に夢も「える。それが彼の仕事な
である。

「それに関してはな
「それでは。それで宜しゅうござります」

セレネーは頭を垂れて述べた。

「私は。それで」

「満足なのだな」

「そうです」

彼女はまた答えた。

「願わくば。それで永遠に彼と」

「考えは変わらないのだな」

それでも彼女に問う。念を押して。

「どうしても」

「はい」

セレネーの考えは変わらなかつた。彼女は夢の世界を選んだのだから。愛しい者と共にいられる、そちらの方を選んだのであつた。

「それで」

「わかつた」

ゼウスも遂に頷いたのだつた。セレネーの心が変わらないとわかつて。沈痛な顔であつたがそれでも彼女の心を汲むことにしたのであつた。

「それでは。そのよつにしようつ

「有り難うござこます」

「これも運命か」

ゼウスはまた沈痛な顔で述べた。その言葉には無念の色をえあつた。

「月の女神の」

だがもう変わらなかつた。セレネーはエントイミオンと共にいることになつた。そうして彼女は遂にエントイミオンと共に永遠に眠

りの中に入ることになった。彼もまたそれを受け入れ一人はそのまま何処かへ消えることになったのであった。

その時だった。アルテミスが最後に自分の宮殿を離れるセレネーに声をかけた。彼女を止める為だ。

「お姉様」

「貴女が言いたいことはわかつてゐるわ」

セレネーはアルテミスに顔を向けて述べた。わかつていても変えるつもりはなかつた。

「それでも私は」

「これで。お別れなのですね」

「そうね」

セレネーは俯いてしまつたアルテミスに述べた。しかしそれでも彼女の決意は変わらないのだった。

「もうこれで」

「考え方直されることはないのですね」

「貴女には悪いけれど」

その言葉だけで充分だった。それだけでセレネーの気持ちがわかつてしまつた。アルテミスももうこれ以上言つことはできなかつた。

「左様ですか」

「私は。神だけれど」

それは自分でもわかつてゐた。だがそれと共に。

「女なの。だから」

「女性であられたいと」

「ええ。恋の中にいたいのよ」

それが偽らざる彼女の心の言葉であった。彼女は神でいるよりも女であることを選んだのだった。だからエンティミオンと共にいることを選んだのである。

「ここでも。貴女には我儘に見えるかも知れないけれど」

「それは」

「いいのよ。隠さなくとも」

アルテミスの目を見て言う。今まで姉妹の様にいた一人だがこの時ばかりは何かが違っていた。もうこれで会うことはない、その悲しみが一人をそうさせていたのだ。

「私は。自分のことだけしか考えていない馬鹿な女なのだから

「私は。そんなことは

「思っていないの？」

「はい」

アルテミスは正直に述べた。その縁の田でじつとセレネーを見詰めている。彼女は嘘を言つことはない。セレネーもそれはわかっている。わかつているからこそ辛いのであった。

「ただ。お姉様これでお別れだとと思うと」

「月を御願いね」

続いてのセレネーの言葉だった。

「あの娘のことは。一人にさせて悪いけれど」

「あの娘のことはお任せ下さい」

「ここでもセレネーを気遣つて言つのだつた。何処までも彼女のことを気にかけていた。

「私が責任を持つて」

「有り難う。じゃあ任せせるわ」

「はい」

「それで。後は」

セレネーはその言葉を受けてからもまた言つ。最後に言つことがあつたのだ。

「貴女に伝えておくことがあるわ

「私ですか」

「ええ。月の女神はね」

静かに彼女に語りはじめた。

「月の女神である限り恋が実ることはないの」

「恋を」

「そう。恋を知つてもそれを楽しんでも最後にあるのは悲しみ」

じつとアルテミスの縁の田を見て語るのだった。その田に驚きの色があるのを見ながら。

「それだけなの。月の女神である限り逃れられない運命なのよ」

「そうなのですか」

「それを忘れないで」

「そうアルテミスに告げた。

「一人になつても。いいわね」

「わかりました」

アルテミスは「こ」では嘘をついているわけではなかつたが結果としてそうなつた。何故なら「」の言葉を本当にわかつてはいなかたからだ。彼女がこの言葉をわかるようになるのはこれからであつた。恋により多くの悲しみを知るよつになつてから。それからであつた。

「じゃあ。これで

「お別れですね、遂に

「さよなら」

セレネーはアルテミスに対して別れの言葉を告げた。

「妹よ、さよなら」

「さよなら」

アルテミスもそれに応えて。今別れの言葉を告げた。

「さよなら、お姉様」

「永遠に」

「けれどお互いは忘れずに」

「ええ。夢の中でも」

そう言ひ合つて遂にセレネーはアルテミスの前から姿を消した。白銀の月の光がそのまま消え失せてしまつよつに。そうして後に残つたのは月の女神の悲しい運命だけであつた。アルテミスはそのことをその都度辛い痛みと共に思い出すのであつた。

2
0
0
7
•
1
1
•
5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3698d/>

受け継がれる運命

2010年10月8日15時04分発行